統一

第百五十六號

明治四十一年二月十五日（毎月一回十五日）發行

要品値上ゲ廣告

顯本法華宗要品　附回向文

紙價印刷費製本料共騰貴に付無止左の通り値上仕候

一上製分壹部に付貳拾貳錢
一並製分壹部に付金拾四錢　の割（郵税當方持）
五拾部以上は多少の割引可仕候

淺草新谷町十四　慶印寺

目次

日蓮上人の信仰　本多日生
堀河の水　笹川眞雖
摩訶般涅槃管見　森川薩山
革新すべき現代の日蓮宗　紀野俊耀
候べく候　青村
嗚呼本光院日稠法師　樂本子
雜報

五十六號

日蓮上人の信仰

（早稲田研究會第四回講演）

本多日生

日蓮上人に對する各種の研究は、近來頓かに盛んになり、隨つて渴仰の聲が高まつて來たのでありますが、今日に於て公正なる批評家は、上人を目して日本の偉人として尊重すべきのみならず、世界に於ける光輝ある聖者として敬慕すべきであると稱揚して居ります

この大聖者たる上人の信仰を遺憾なく御紹介することは、非凡の人を俟つて始めて望むべきことであつて、吾々の如き薄信無識のものが爲し能ふことではありません、只今日語らんとするは、予が多年研究渴仰の結果、しば〳〵靜思して得たる感想に就いて、上人信仰の或る一面を開陳するに過ぎないのであります

「日本第一の智者と成し給へ」と、至誠熱烈なる祈願を捧げ、爾來二十箇年刻苦修養して一閻浮提第一の本尊を光顯し、前後三十年間奮鬪活動の生涯を送くり給へる上人の、生氣あり光明ある信仰は、固より議論や批評を超越せる權威と活力とを有せることは、何人も異議なきことゝ思ふが、今は解釋し得らるゝ範圍に於て時代の思想界に關係せる問題に就いて、上人の信仰の輪廓を少しく述へて、終りにその內容をもざつと御紹介したいと思ふのである

上人の信仰を一言にして申せば、古今東西の宗教問題として橫はれる最大最高の難問を解決して、現代教學界の唯一の希望を充たすに足るべき、完全なる大信仰であります

宗教問題中最重最要の問題は、無論信仰問題であります

して、その信仰問題中特に重要なるは、知識と信仰との調和、信仰と倫理との調和の二大問題に存するのであります

先づ知識と信仰との關係に就いて見まするに、或る論者は、絕對に調和は不可能なりとして單に感情的の信仰に安んずべきを唱へ、又或る論者は、知識の尊重すべきを知つて一概に信仰を迷想として排斥し、以て文

明に貢献する所以であると思ひ、縦しその調和を理想する論者も、未だ適當なる解決を握ることが出來ずして彷徨ふて居るものが多いのである、然るに上人の信仰は、能く兩者の關係に就いて根本的の調和を示せる大信仰であります

次に信仰と倫理との關係に就いても、或る論者は、單に倫理の尊重すべきを知つて信仰に獨立的の價値を認めず、隨つて宗教をして全然倫理化せしめずんば止まずとまで極論して居るが、一方には、信仰は超倫理的の價値ありとして倫理と背反するやうの信仰をも是認せんとして居る、縦し信仰と倫理との調和を理想し、又理想するのみでなく實際に履修して居るものでも、その多くは、間に合はせの解釋に安んじて、未だ根本的に確實なる調和の根據と、その實踐の妙行とを獲て居らぬのである、而かるに上人の信仰に至りては、能く兩者の調和に就いて根底的の解決を得て、實踐の妙行を示せる大信仰であります

今はこの二大問題中、信仰と倫理との調和に關する方面を略述して、知識と信仰との調和に就いて上人の信仰を論明して見やうと思ふ

近時の思潮を觀察致しまするに、一方には、從來の獨斷的若しくは感情的の信仰を賤しみまして、批判的合理的に信仰の立脚地を築かんと努力して居る者がありますが、この人々は未だ宗教信仰の眞味を感知し得ないやうである、理想教やユニテリアンや新佛教徒の主義は、この種の見解に屬して居るので、學者として佛教の研究を志す人々の多くも、亦この傾向を帶びて居るやうに思はれます、而して他面には、之に反して、宗教の信仰は認識已上に根據を有するを說いて、絕待は不可解なるを骨張し、翻つて感情的の信仰を鼓吹する人々がある、基督教の大部分と、佛教の眞宗、殊に精神界一派は、正しくこの種の見解を執つて居るので、故綱島梁川氏の病間錄、回光錄はこの種に屬して居る、斯かる純感情的に信仰を採用するの結果は、遂に天理教や蓮門教の如き稗劣なる信仰をも是正すべき批判の標準を有せぬことになるので、信仰は各人の好

む所を是とするの外、何等正邪優劣の辯明を要せぬと云ふやうな闇短不明の見解に陷いるのである

已上の二偏傾の外に、僅かに佛教徒の或る健全なる一部に、この偏傾を去つて理性と感情との調和せられ、知識と信仰との妙契せる見解を求めて居るものがある、されども只方針と着眼とが出來たと云ふまでに止まつて、未だ教義上に成立的に根底的に解決の鍵を握つて居る人を見出さないのである、則ち今日の有樣は、斯かる希望を有するものが學術界にも宗教界にも生じて來たけれども、未だ未了の問題に屬して居るのであります

この今理派と、感情派と、又調和派との各々の主張は決して今日に起れる新問題ではありません、子細に考察しますれば、この相違は、實に古今東西の教學界に横はつて居つた唯一最大の宗教問題であります

東洋に於きましては、哲學と宗教との關係としての大問題であつて、東洋にては、佛教に於ける客体として涅槃論と彼岸論の關係であつて、行門としては法行信行の大問題であります

西洋の哲學史を見ますれば、哲學と宗教との關係は古今に亘れる最大の問題であつて、二十世紀の學界に於ける唯一の事業最大の希望は、實に兩者の適當なる調和を見んとするの一事であります、ヘーゲルは、哲學と宗教とは內容は一つであつて、その異なれるは只形式である、哲學は概念を貴び、宗教は表象に存するの差あるのみと云ひ、ストラウスは、哲學者たらんとすれば宗教の立脚地を捨てねばならぬと云ひ、彼の有名なるカントは、二種の批判を分ちて宗教と哲學との立脚地を別ち、そこに却つて調和を試みんとしたのであるが、未だ成効したものではない、彼は純粹理性批判の上にては、不可解に終るの外なきを說いて、物如の本体を不可知と云ひ、他面に純粹實踐批判なるものを立てゝ、こゝには現象の可知を基礎として、道義宗教の必要を說いて信仰の立脚地を定めんとしたのであつて、この二種の批判を分ちて、信仰の基礎を說かんとするは、正しく知識と信仰との調和に就いて第一義の

上には、不可解なれば相爭ふも、結局當否を定め難しとして、その衝突を緩和し、而して第二義門に下りて、調和を試みたものと思ふ、カント已後、その學統は二派に分かれて、一方には物如を輕視して單に實踐的感情的の信仰に安んずるあり、他方には物如を重視して益々哲學の本領を發揮して居るので、斯くて感情的の信仰と哲學的の知識とは、今日に至るも尙ほ適當なる解決を得るなくして、二十世紀の天地に唯一の希望として學者の頭上に懸つて居るのである

又之を東洋に見ますれば、夙に佛陀出世の前に在りて、波羅門教の中にもこの問題は盛んに論討せられて居つたのである、涅槃の悟を得るに就いて、自性を正因とする一派と、自在天の力に依ると云ふ一派とが、尤も有力なる論點である、この自性正因說は、自己の自性に涅槃の悟を得べき力あるを說いて、觀察思惟の行よりして開悟せんとするので、頗ぶる知力を尊重して居る、又自在天派は、涅槃の悟を得るは一に自在天の加持力に依るものなれば、この天の他力を信賴すべしと說いて頗ぶる感情的の信仰を尊重して居たのである、又その開悟に就いては、入成就を說いて居るが、その中に自度成と云ふは「此の人最利自から思惟して波若を得解脫を成す、他の敎に由らず」と說き、竟度成と云ふは「自に由り他に由るが故に波若を得解脫を成す」と說き、全度成と云ふは「一向他の敎に由る」と說いて居るので、この三種は、自力と、他力と、自他の合力との別であつて、正しく知力に由ると、感情に由ると、又兩者の調和を取るとの區別であるが、之が充分に解決せられずして紛々論爭して居つたのである

佛敎に於きましても、先づ小乘を見れば、その初門に已に二行が分かれて居る、彼の五停心の第五の利根の者が界方便に依り、鈍根の者が念佛停心に依ると云ふが、大に着眼すべき點であると思ふ、界方便は宇宙觀であつて、法界は地水火風空の五大所成である、假りに和合して種々の現象を生ずるも、畢竟空にして方便的存在に外ならぬと觀察して、この智力の發達に依りて開悟するのである、念佛停心は之に異なり、知力的

觀念を避け單に佛陀の功德力用を念じて、その佛力の加被に依りて開悟するを云ふのである、この二者が共に第五の停心として對立して居る上に、次に見道の位に入りても、隨法行、隨信行の二門が對立して、智力的の行門と信仰的の行門とが開許されて居る

大乘に就いても、龍樹の毘婆婆論の易行品に、法行の智力的開悟を陸路の步行に比して難行と云ふ、信行の信仰的開悟を水道の乘船に比して易行と說かれて居る、こゝにも知力と信仰との對立が見らるゝのであつて、この信仰は正しく念佛開悟である、この念佛は廣義であつて、三世十方の諸佛を念ずるの義になつて居る、淨土門家に云ふ彌陀專修の如き狹義ではない、凡そ念佛主義にも、諸佛を念ずると、一佛を念ずると、一多統一の本佛を念ずるとの別がある、諸佛主義でも小乘には時間的に中心を釋迦に取り、權大乘では空間的に中心を釋迦に取り、法華經にては時間空間を貫いて三世盡十方の中心統一を釋尊に取つてあるので、又一佛主義でも、大小權實を通じての正系は釋尊にあること無論のことである、彌陀や大日に傾きたるは、一機一緣の小事を知らずして曲解せしものであつて、釋迦の佛敎に於ける大綱を逸却して居ることは、少しく大藏に眼を晒して公正なる觀察を遂ぐる人の容易に知悉せらるべき所である、唯念佛主義に於て一段の着目を要するは、一多統一の本佛に信依するの妙旨にあることを忘れてはならぬ、この關係すら會得せずして佛敎の信仰を論ぜんとする人があるならば、必らず僻見に墮つることは恰も皇統の尊嚴統一の大權を知らずして、日本の國体國政を論ずるの愚と異ならぬのである

廣く佛敎各宗を通觀致しますれば、或は觀念の智力的法行に由るものあれば、或は信仰の感情的に安んずるものあり、又時には兩者を併用して居るものもある、然かれども根底的に兩者の解決と調和とを得たる大信仰は多く逸して居るので、大低は間に合はせの說に過ぎぬのである

華嚴宗は、事々無礙の法界觀を知力的に行ふて、而か

も一面に盧舎那佛に依つて居るが、而かも佛陀觀の統一も出來ねば、智行信行の根本的調和も出來て居らぬ、眞言宗は、六大無碍の法界觀と毘盧遮那佛の加持とを說くも、根本的に信智の調和が出來て居らぬ、多くは迷信化して居るのである、禪宗は、自性の不思議を觀ずる知的方面に偏して佛力を信賴しない、故に信智の調和は出來て居らぬ、念佛宗は、觀念行を自力と貶して一向に彌陀の他力に乘托せしむるので、これも感情的信仰に安んじて信智の根底的調和は出來て居らぬ

斯く見來れば、何れも或は理性に偏するか、或は感情に流れて居つて、未だ信智の調和を完成したる大敎義大信仰を得て居らぬのである

されば西洋に於ける哲學と宗敎との調和と云ひ、東洋に於ける法界觀念佛觀の一致と云ひ、何れも古來の大問題であつて、現代にも知識と信仰との調和を叫び、理性と感情との一致を唱ふるものあるを見るすれば、知識と信仰との調和せられたる大信仰を得んとするは、古今東西唯一の宗敎問題としての最大希望であることが明かであると思ふ

この最大希望を充たし、最大難問を解決して得給へる大信仰が、即ち日蓮上人の信仰であります

上人が二十箇年の精練研鑽は、一大藏經を看破して佛敎の綱領神髓を握り、その正系正統を稟承し給へるのであつて、各宗派の主張をも深き同情を以てその主張の根底に下りて吟味し酌量し、公正なる取捨の上に更らに新たなる空前光後の大信仰を獲得し給ふたのである、その根據は廣く大藏全躰に亘り、各宗の主張をも參酌し給へるは無論なれども、首たる根據は、經典としては妙法華經、釋書としては智者大師の法華の三大部である

さて上人の妙經及び釋書より看破了し給へる大敎義は如何と云ふに、正しく知識と信仰との調和せられたる大信仰であります

法華經は、一面より見るすれば、實相論の上に佛敎の哲學面の敎義を統一し完成せるものであつて、行門としては智行の頂點に登れるものであるが、他面より見

るすれば、佛陀論の上に佛敎の宗敎面の敎義を統一し完成せるものであつて、行門としては信行の頂點に位せるものである

この二行の併立までは何人にも見得べきことであるが今一段深く上人は看破し給ふたのである、それは實相論の頂點を精査すれば遂に佛陀に合体し、觀念智行の頂點を吟味すれば正しく信行に一致して、一大圓佛の他に實相觀なく、一大信仰の他に觀念行なく、眞の佛陀觀と眞の信念行とに於て佛敎上の最大問題を解決し調和し、統一し得ることを、尤も分明に識得し給ふたのである

再言せば

法華經は、佛陀の上に於ては、智慧門の極致も慈悲門の奥底をも傾け盡し給へるもの

吾人の行法に於ては、智慧行の妙處も信念行の精髓をも顯はし示し給へるもの

而して佛陀それは、智慧圓滿と同時に、法佛不二であつて三身即一の如來である

信行それは、信智不二と同時に、觀念を攝得せる大信行である

この大見地に立てる日蓮上人は、天台智者の主張に對して如何なる批判をか抱き給へる

智者大師は、一大藏經を剖判することに於て、善盡し美盡せり、又妙法華經を疏釋するに於ても、幾多の妙處を發揮せられたれば、三國傑出の偉人に相違ない、その指導の高恩は深く感謝し敬禮すべきであるが、然しながら智者大師は、法華經の實相觀の方面に於て、觀念行の止觀を立て給へるに止まり、佛陀觀の方面に、遺漏少なからずして、信念行の妙致は未だ盡さざる所がある、加之實相觀の頂點が佛陀に合躰し、觀念行の終局が信行に統攝せらるゝの妙旨に至りては、全く光顯するなくして止みたる人である

上人は、智者大師を見ること實に斯くの如くでありましたが、こゝに少しく佛敎史に於ける智者大師の位置を語るの必要があります、智者大師の佛敎史に於けるは、西洋の哲學史に於けるカントの地位に酷似して居

ると思ふ

カントが認識論大成の名譽を擔へるは、智者が佛敎判釋の名譽を有すると相似て居る、智者が眞如を解して不可思議となしたると、カントが理性批判の上に物如を不可解と說けると相似て居る、カントが實踐批判の上に道義宗敎を第二義門に於て立てたると、智者が以偏助圓と稱して方便行を採用せると相似て居る、智者已後、妙樂、傳敎が實相觀を稟承して智惠行を尊重し、惠心、法然、親鸞が他力門を主張して智行を拒斥せると、カント已後の學派が二分して、一は物如を拒斥して感情的信仰の辯護に努め、他は物如を尊重して哲學の本領より進まんと努力して居るのとは、大に相似て居ると思ふ

智者大師の佛敎史に於ける位置實に斯くの如くてありますが、日蓮上人は、智者大師を內鑑冷然の人と稱歎せられて、大師が立つる觀念の妙處を拒斥し給はず、回避し給はず、この觀念の大智見を承けて堂々としてその針路を進み給ふて、その頂點に大發揮を試みて遂に信行に突入し、却つて彼が尊重せる觀念をも統攝し收攬し給ふたのである

上人は如何にして智者の觀念を信行に統攝し收攬し給ふしかと云ふに、上人が觀心本尊抄、立正觀抄等の大著は、即ちこの疑問を解釋し給へる本化の妙判に外ならぬ、これ上人の敎義信仰を窺はんとするものゝ精研を要する所である、今之を詳說することは不能なれども、少しく辯明して見やうと思ふ

智者大師の觀念は、起信論に言ふ眞如の一理より萬法を生起せりとの理体說に安んぜずして、更らに事理不二を說いて、眞如の理体に內包せる三千諸法と云ふも、事造緣起の外界に顯現せる三千諸法と云ふも、二者二別あるのではない、不變の水は即隨緣の波、水波即一にして、二物相合するにあらず、背面相礙するにあらず、當体全是の即なりと云ふのである

智者大師が斯く唱導し給へる法界觀の見地を避けずして、この針路を正面に堂々と進み行きて、そこに上人の大智見は、大信仰に突入したのである、それは智者

の云ふ如く果して事理不二であつて、事造の三千それが即本体であるならば、三千の諸法それが即實在者である、而して三千の諸法と云ふも要は十界であつて、十界は迷者の九界と悟者の佛界との二に外ならぬ、されば迷者の九界すら實在と云ふならば、悟者の佛界は無論實在の聖位に立てるものである、この迷悟兩者が實在であつて、それが性質上に互具し、体質上に互具して居ることも、圓融の妙諦として聞き得たが、それは必然的、機械的の互具とも云ふべきものであつて、意匠的、精神的の互具でない、即ち談理的敎義に過ぎぬ、この必然的、機械的の互具の上に實際的、活動的に意匠精神の關係を認めねばならぬ、それは佛陀の活動は、その意匠を尋ぬれば、每自念願の大慈悲であつて、未曾有廣の佛事を作し給ふ、吾々もこゝに發心信仰の精神を起して、實際的に佛陀を渴仰して、この渴仰と慈悲との實際的接觸の上に功德加持の感應する所、是れ即ち實際的互具である、宗敎の妙致は此處に存するのである、是れが大觀念であつて即大信仰である、この佛陀の活動を渴仰する所に眞の法界觀は成立するのである

再言すれば

活動的の關係、意匠的の關係とは、佛陀も活物なれば、吾人も亦活物であつて、佛陀の活動は慈悲濟度に外ならぬ、吾人の活動には向上向下の二面あるも、向上面は佛陀の境界に達せんと望む發心である、この佛陀の慈悲濟度と吾人の發心信仰とが精神的に交接する所、即ち感應道交であつて、佛陀には已に功德力用の備はれるありて、吾等は頓に濟度の活力を賦與せらるゝのである、その時吾等本具の佛体の顯現すべき了因種を決定するのである

斯かる狀態、それが法界の眞實相である

斯かる信仰、それが佛敎の大知見である

この佛陀の力と、吾人の力との交通をば、實相中の唯一の着眼點とするのである

この信仰を本門の正觀と稱歎し、本化の事觀と誇揚するのであつて、智力的觀念を貶して、去年の曆、

昨日の食物に比し、彼が如き性具体具の機械的互具に止まりて、活動的精神的の實際の濟度を說かざるを奪つて、別數の見に同すと云ふのである

斯かる妙信であるから、自力も定んで自力にあらず、他力も定んで他力にあらずと說いて、妙合不思議の大信仰を光揚し給ふたのである

されば之を信行の本尊として確立し給ふ時「一念三千の法門をふりすゝぎたてたる大曼陀羅なり、當世の習ひそこないの學者等夢にも知らざる法門なり」と喝破し、「この法門顯はるれば、正法像法に論師人師の立て始めし法門は、皆日出て〻後の星の光」と斷定し給ふたのである、「經の題目を唱ふると、觀念と、一なる事心得がたしと恐痴の人は思ひ給ふべし」と、嗚呼聖訓萬古に輝けり、斯かる透明清新なる指數を拜して、誰か感歎せざるものぞ

上人の信仰は、斯くの如くに觀念攝得の大信仰であります、上に本佛の力を渴仰することの極めて厚きと同時に、下に吾人の本体の無限の價値をも尊重するのである、此れ則ち宗教の客体と主体とに於て、共に絶對的發揮を得て巧妙なる調和を示せる大信仰であります

之を要するに、上人の信仰は、知識と信仰との根本的調和を示して、古今東西に於ける教學界の最大の難問を解決し、二十世紀の唯一の渴仰最大の希望を充たすに足るべき大信仰と稱するも、決して過當でないと思ふ、東西の文明が今一段進んだならば、必らず上人の信仰を敬慕して、一天四海普ねく法益に浴するの日が來るのである、この主意を證明すべき上人の聖訓は極めて多いのであつて、一々擧ぐるに勝へぬのであります、上人の遺文を研究する人、若し一たび意をこゝに留めらるれば、到處にこの種の光輝ある聖訓に接して、上人が知見の絶倫なるに感じ、又その絶大なる信仰に打たれて、自から同一の信仰を獲得せずんば止まずとの勇猛熱烈なる道念を發起せらるることと信じます、すれば、こゝに謹んで御遺文の研鑽をお勸め致します

堀川の水

笹川眞應編

一　眞水の源は

威勢は富士よりも高き鎌倉山、と詩人の謠ひし北條は貞時の世に、石堂太郎覺知といふ文武二道の達人あり、天晴武士の龜鑑とぞ人に敬はれ、身は源家名門の末葉に生まれたるも、空しく荊棘の中に埋もれて、北條氏の旗風に塵くの是非なけれ。

風教の衰へたる、世は下剋上となり、凌辱を恣にして人道の壞れたるは、正義の權威を輝かすの便なきによる、石堂覺知これを公憤き、大鵬の志を齎らして奥州に到る、此に會津の城主葦名盛宗は、東北大名の重鎭で威名遠近に振ふ、盛宗石堂の才能を慕ひ、國色の譽れ高きその娘清玉姫を娶はして、城北大塚の里に居く大塚の館と稱す、覺知夫妻年を經て子なきを憂ひ、瀧澤の八幡宮に祈り靈應を蒙る、臨月宮の前階に於て遽に產氣つき男子生まる、眉目秀麗、身體玉を欺くばかりなり、覺知大に悅び、この見必らず名を天下に擧げんとて玉千代丸と名けゝる、是れ聖祖入滅以後三十三年に當り、花園天皇の正和三年四月二十八日である、玉千代丸十五歲にして父母を喪ひ、哀悼の念禁ずる能はず、元弘二年十九歲にして比叡山に登り、時の學匠慈遍僧正を師とし、薙染してその名を玄妙と改め、後年顯本法華宗の開祖と仰がるゝ日什聖人は、實にこの人である。

二　桐檀は二葉より香しく

叡山在學の玄妙法師は、研鑽怠りなく、飛鳥の中の鳳凰の如く、走獸の中の麒麟の如く、智辯解行拜儕を拔き、正平六年三十八歲にして、山門の學頭に進む、されど玄妙法師は、天台教系の原始的ならず謬亂せるに疑團を抱き、一日慈遍僧正に問ふに、この事を以てす、僧正曰く、吾も又多年この疑を存す、而かも世は劍戟に鬪諍の悲劇を演じ、叡山また靜かならず、徒らに名利の巷に彷徨ふの衰れなる、風に聞くに、昔此の所の淨光院にありし是性公(聖祖)、關東にありて法

華眞實の教法を弘むと、吾れ既に老いて餘命旦夕に迫まる、願はゝ東國に緣あり往いてこれを探れと、玄妙法師大に心を動かす、然れども孝養の心厚き法師は、僧正の老衰を思ふて、左右に奉仕する事多年、建德二年僧正遷化せられたれば、同三年師遂に山を辭して會津に還へる、時に外戚葦名氏、師をして羽黑山東光寺の主職たらしめんとす、師これを欲せずして固く辭す、而かも懇請して止まず、依て須臾假名の牀に移り、圓頓の扉を開き、止觀の月を凝らす、道風遠近に聞へ、來り學ぶ者甚だ多く、德香學侶に薰ず、汎く教觀の旨を宣べ、深く解行の要路を示さる、世人玄妙能化と敬稱す、是の如くする十年、能化素に思ふに、教化にその力を效すも、學侶その行に堪ふる者尠なく、但名相を逐ふて他の實を數ふるの迂なる、一日も早く葦祖の法義を覩ふの便りあらんことを思念せられた。

三　老偉人の面目はこれより

ある時能化、聖祖の撰述せられし開目抄と如說修行抄を讀み、渴仰の涙と隨喜の感に打たれ、末法の教化は實に此にあることを了知せられた、宜哉、開目抄は葦祖本化の智光を以て佛教の根元を自得せられたる、所謂自解佛乘の明鑑を殘りなく發揮し、世間の學乘より佛教各宗の教義を批判せられ、倫道の大本と教法の原理は、法華經によりて調整したることを顯はされ、救濟の第一義は獻身奮鬪にあるべき旨を、自己の活歷史に證して論せられたる、熱血生氣文字に溢れたる活文章である、聖祖の信念、聖祖の志望、聖祖の行動等は、すべて開目抄に發現されてある、また如說修行抄は、吾等が正法を信仰するに就て、奮鬪すべき覺悟を教訓せられたのである、聖祖の法理化儀はこの兩書にあり、能化の一度此の御書を拜して感動せられしは、所以なきにあらず、六十七の老軀を正法弘通のために聲嘶を顧みず利養を念頭に措かず、奮然として改宗を決行せんとする勇猛の意氣、精進の振舞は、宗教史上特筆すべき、老梅の香薰を放つ、偉人の面目である。

四　隱居主義は佛陀の斥くる所

孤杖に鞋山河を跋涉して救濟に努められたる先哲は、身輕法重死身弘法の教訓を實踐したるものである、空しく山林に、又は閑處に、隱居靜逸を貪ぼるは、佛陀の法弟でない、玄妙能化は、聖祖の眞意教訓を會得し、天台宗を改めむとす、近鄕の日蓮宗みな能化の高名と學德を怖れてこれを容るゝ者なし、下總地方は宗旨漸く啓運なりと聞かれ、かの地に行かば吾が所願を全ふせんと障礙を排して單身下總に赴かんとせらる、善如等六人の法弟、その壯烈なる動作に心服し、請て俱に從ふ、師弟六人、下總國眞間の弘法寺に到る、即ち山主日宗に面會して改宗の事情を述べ、同意を求め此に留まりて宗義を究め、また中山等に就て聖祖の眞蹟を拜す、名を日什と改む、聖人謂へらく、聖祖經卷相承によりて、佛教の原理を究めらる、日什また聖祖を師匠と仰ぎ經卷相承の宗脈を奉ずべし、一子相傳、內證口傳を餝る者は、俱に佛教の玄義を語るに足らず、と、嗚呼聖人が道のために身命を限りとして奮鬪せんとせらるゝ、その信念の堅確なる、仰げば彌々高く臨めば彌々深く、老偉人の風格品性の雄健なる、青雲の志ある少年の興奮劑となり、老衰を嘆つ人のためには不老不死の妙藥とならむ。

五　老偉人は奮鬪の舞臺に登ぼる

明れば弘和元年、日什聖人六十八歲、鑊鑠としてその意氣壯者を凌ぐの慨あり、熟々世上の狀態を見るに天日南北に光を爭ひ、武人各その據處ありて兵戰絕間なく、民は誅求に苦しみてその歸する所を知らず、正法の光は隱れて破國の慘狀甚しく、聖祖の讖言その印は目前にあり、而して聖祖の門流互に正嫡を爭ふて法義の統一を缺き、僧侶姑息に流れて立宗の精神は銷磨せり、聖人奮然として立ち、これを啓發誘導せんとし、諗げて曰く、聖祖顯本の一道を弘む、何んぞ多端に岐るゝの謂はれあらんや、我れ宿緣淺からずして本化の正流を汲む、身輕法重死身弘法の誓願吾の生命なり、已に聖祖入滅此に百年、立正安國の主義は、國民覺醒の聲なるに、世は皆正法に背き、謗法の罪業をなす者天下を擧てこの亂倫の行をなす、百年追恩のために天奏を遂げて、聖祖の本願を顯揚するに如ずと、

時は四月のはじめ下總を發して同二十七日京都に着し天奏の準備を整へ六月二十二日參内を遂げ、關白二條良基公に對面し立正安國論に自己が治國の策を書して獻じ、詳に教法の正邪と信仰の大事を陳べしに、良基公大に感じて直に陛下に奏上せしかば、叡慮斜ならず、七月六日、弘宗の倫旨と、二位僧都の位官を賜はる。

爾後奏聞二回、良基公、聖祖の本尊を拜し受戒せらる、聖人曰く、公はこれ天下の大綱なり、一日も早く正法を立て謗法を除き、國家を泰山の安きに置き給へ、これ吾が奏する微衷なりと、公嘆じて曰く、師の主張する所、理義明白にして忠言甚だ滿足す、然れども今既に下尅上となり、政治はすべて室町將軍に歸し、我等は虜器を擁するに止まる、願くば師これを察せよと、聖人暗涙數行禁ずる能はず、拜謝して退く、天奏の事蓋し容易にあらず、聖祖在世の時より一度この正法を天聽に達せんとの志願なりしが、聖人の如く教義を遺憾なく陳べられしは、空前の慶事ぞと當時の人々の稱讃したる所なりき。

六　老偉人の奮鬪は彌々昂れり

聖人は、さらに武家に對し曉諭を試み、鎌倉管領氏滿に室町將軍義滿に、屢々迫害を凌ぎて、謗法禁斷と正法信仰をすゝめられ、諸宗僧侶をして顏色なからしめられたり、それ武臣權を弄し天日九重の雲に蔽るゝは國民に倫理思想の普及せざるによる、殊に義滿は禪宗に淫し、貶佛の理致を悅ぶ者、自己が僑恣の妄想に驅れて主上を輕視し、放逸の亂行に甘んずる悖德漢である、此の如き武家に諫言を試みるの難き、聖祖の時業に然り、聖人が苦心奮鬪の跡想像するに餘りあり、況んや各宗國家の權力に阿諛にあらざれば、これに屈從するの族のみ、この中に毅然として國家の權力壓迫に抗して正義を布くは、聖祖以來の活歷史にして、この宗風は、聖人及び法弟に傳はり、慶長に到り常樂院日經上人が、正法護持の下に、家康のために慘刑に處せられたるが如き、身輕法重死身弘法の金言を、色鑑したるものである。

世に日本國民が智情意の圓滿に按排せられ、强剛耐忍の志念力堅固を誇り、これはこれ武士道の生ひ所とするが、吾れをして謂はしめば、武士道の本領は、身輕法重死身弘法の金言に基くものと斷言するに憚らない、それ身を輕んじて正義を重んじ、身を死して正義を弘ひとは、慈悲の活動にして、恭儉己を持し博愛衆に及ぼすの、剛健の意志、濃厚の情致を、更に擴充たるものにして、これが眞價を認めてこそ、人格觀念に功果を收め得ることになる。

七　老偉人が坦懷なる雅量は

當時聖祖の諸門流は、聖祖の本領を忘れ、教義の根本を究めず、猥に枝葉に亘りて是非を諍論するの痴態を、聖人痛たく嘆かれ、中正の意見を示してこれが統一を德遵らる、時に京都妙顯寺、叡山僧徒のために廢却せられ、山主日霽は若狹の小濱に遁がる、聖人遠州にあり、これを聞て直に法弟大輔坊をして往て日霽を慰藉せしめ、日穩をして近國の諸寺を勸誘せしめて、聖祖の鴻業を廣布するに力を致さんことを計らしむ、諸寺の僧徒逡巡してこれに應せず、これによりて聖人單身京都に到る、時に元中五年聖人七十五歳、日霽丹波の小野にありと聞き、これを尋ねて奮起せんことを誘引せらる、日霽大にその高義を感謝し後日を約し、而して更に備中の國に隱る、聖人これを聞て道念の微なるを悲む、日霽は當時宗門の俊傑である、この人にして此の如し、聖人これに於て獨力經營を圖かる、聖人の熱烈、聖人の信念、聖人の德操は、人を動かし、その門に集まる人多し、依て元中六年七十六才にして聖人六條室町の坊舍を改めて寺となし、妙塔山妙滿寺の號を建て、一宗傳道の根據地とせらる、それ帝都布教は、各宗教家の着眼する所、聖人また傳道の根據を帝都に指定せしは、形勝を占めて活動するにあり、

老が身は何處の果にくつるとも
心は澄まん堀河の水

と、聖人の詠れたるは、聖意の存する所を知るに足る、聖人京都弘通の時に、荻氏譽といふ人あり、聖人に傳道の資を献せんとす、聖人斥けて曰く、この正法を

信ずる事實にせざればその資を受けずと、氏慟泣て曰く、我れ世祿のためにこの正法を信ずる事實にする能はず、暫らく時を俟て必らずこれを事實にすべし、聖人願くはこれを哀み、一子をして法弟たらしめ給へと、聖人これを容る、これは清廉の美談である、今の政治家は、政略のために宗教を利用し、宗教家、また權略のためにこれを喜び、政略のために好遇せらるゝも恬として恥ず、政略を弄する政治家は、國民に對し全情心に乏しく、權略を用ゆる宗教家は、念頭毫も救濟の思ひなし、これを對治するは、また安國の一手段であると思ふ。

聖人改宗以來、或時は關東に、或時は京都に、展轉往復せられ、或は天奏に、或は武家に、諫言をなし、或は寺院の遺立に、瞬時の暇なく、古稀の老軀を厭はず疲瘁せらる、此の如くする十有二年、志業漸くその緒に就く、元中八年の秋京都を辭して會津に還る、草名氏改宗をなし、聖人のために一宇を建つ、寶塔山妙法寺はこれなり、元中九年(北朝明德三年)二月二十八日聖人は、法悅と滿足に充たされ、七十九歲の高齡を、人生活動の一期として、寂光の本國土に移り給ふ。

日月の光明の諸の闇を除くが如く、聖人もまた世間に活動して衆生救濟の本願を果し給ふ、法悅はこれ、滿足はこれにあらずして他に求むるの道は決してない。

八　人格觀念の功果は

聖人の人格は、すべての方面に於て超越してゐる、聖祖の人格の高く超越し、萬世の師表として、これを渴仰する者今や多し、併しながら、高き人格に同化することは、甚だ難きことである、されば鍛練と修養を積むの覺悟がなければならない、聖人は一舉手一投足、すべて聖祖の振舞に隨順せられた、嘗て門弟に敎へらるゝに、日什は聖祖に歸し奉るもの、敎義化導は聖祖の御書を明鑑とすると、この見解は聖人の信念なれば、敎義に關する聖人の芳躅はなきも、元中五年(北朝嘉慶三年)門弟日妙の一周忌を營む時、一には追福のために、二には末世の法弟のために、撰ばれたる諷誦章は、義理宏遠にして、文章の秀健なる、これを讀む者をして、聖人の學殖の富贍なるに心服せしむ、聖人は聖祖を師匠として、その敎誡を嚴格に體認し、聖祖の人格に同化せられしは、我等の人格觀念に印象を與ふる好箇の材料である。

偉人の人格は、實に國民を指導し、風敎を維持するに、適切なる活ける敎訓にして、道德の大法則人道の大義は、最良なる顯本の正法と、これを實現する偉人の人格によりて、大なる功果がある、日蓮の法孫を以て任じ、日什が末弟なりと呼ぶ者、國民に信念なく墮落に傾く今の世に、健鬪傳道する勇猛精進の大佛事を成辨せずして、何んとして報恩の道を果すべき。

寄書欄

摩訶般涅槃管見

東金　森川薩山

明治四十一年二月は來たれり、今正しく釋尊涅槃の紀念月なり、吾人佛凰の渴大な感謝し、鷲頭靈鷲般涅槃か觀がはざるを得ず、去れど涅槃は、幽玄なり甚深なり、唯佛與佛の境界なり、吾人凡有つて節無し文なし、僅かに涅槃界中の一點に觸れ、佛陀の慈光に浴せん矣

庶人の死是を死と言ひ、高貴の永眠薨亦た崩と稱す、佛陀の入滅歷史的に無餘涅槃と言ひ、超歷史的の佛陀、是れを摩訶般涅槃に住し給ふと稱し奉る、今を去る三千有餘の往昔、雪山北に發へ恒河南に流るゝ邊、土地豐饒國富無限にして、四時春の如き王國の君主、淨飯王の子として、摩耶夫人の寵兒として、二月八日陽春花笑ひ鳥歌ふ林微尼園、無憂樹の下に生れ玉ひしは誰ぞ、是れ幾億の衆生を永劫無斷に救濟し玉ふ釋迦牟尼大世尊なり、世尊の無際無限の慈悲は、金殿玉樓も何かせん、群臣美姫も心を樂しましむるに足らず、珍寶珠玉亦た歡悅の資たるを得ず、年壯にして凡庶肉欲の奴たる時、寶冠錦衣を脫し、夜間白馬に乘じ去て山林に入り、當時波羅門の習風に從ひ、苦行習練數年にして瘦身骨立、深く婆羅門敎徒の學理を究め玉ひしも、多く非想非非想の上天を極理とし、未だ究竟の說にあらず、茲に於て、斷然彼尊の無益なる苦行を捨棄し、

尼連禪河に身を淨め、一牧女が乳糜に體力を回復し、菩提樹の下に草を以て座とし、安祥として三昧に入り、幾多の惡魔と健闘し、二月八日明星東に現るゝ時、豁然阿耨多羅三藐三菩提を得玉ひてより、五比丘の化導を初めとし、佛道とは信心是れなりと言ひ、或は不放逸是れなりと言ひ、或は四念處身受心法是れなりと言ひ、或は念佛是れなりと云ひ、或は空寂の阿蘭若處にて獨座思惟是れなりと言ひ、或は爲人說法是れなりと言ひ、或は善友に親近す是れなりと言ひ、或は八正道正見、正思、正語、正業、正命、正精進、正念、正定、是れなりと言ひ、或は六波羅密布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧、是れなりと言ひ、時により機により種々に法を說き、尙ほ七語を以て無滯無礙に化導し給ふ、即ち殺生を好み瞋恚貪欲邪見を行ふ者を是れ地獄なりと訶責し給ひ、此れに反し善事を行ふ者を人天なりと贊稱し、以て由因知果の因語を用ひ、時に貧窮にして顏貌醜陋不自在なる者には、過去の破戒、妬心、無慚、無愧の報なりと言ひ、多財巨富にして諸根端正威德自在なる者には、精勤、自省の果なりとの果語を用ひ、時に衆生現在の身心は過去の業果にして、此の身心に行ふ諸業亦た未來身心の因なりとの因果語を用ひ、時に佛法は大海の如し、如來は大良醫なり、衆生は盲目者なり、迷は薪なり智は火なり、憍慢は乾燥したる豆なり、正智の錐察易に刺す能はず等の喩語を用ひ、時に天地は合すべし、河は海に入らず、雙手須彌を動かすとも、如來の語に妄語なしとの不聽語を用ひ、時に各地の言語風俗に依り、衆生の解し易き世流布語を用ひ、時に惡行の者を訶責して自ら反省せしめ、他の善行を見て讚歎し、衆生をして善心を生ぜしむるの如意語を用ひ、尙ほ隨他意語、隨自意語、亦た隨自他語を用ひ玉ひて、四辨八音誘引調伏し給ふ事、數十年にして、隨自意秘極の法華經を說き、今者已滿足と宣し給ひて後、叢林一時として枝葉繁茂し、種々の妙華周徧して枝幹を嚴飾し、微風吹動して微妙の天樂を奏し、龍泉流水香潔にして眞琉璃の如き跋提河の畔、沙羅林の下に入り玉ひしも、世尊の慈悲は衆生を視ること一子羅睺羅の如く憐憫し覆護し玉ひて、若し疑ふ所あらば、最後の問を爲すべしと懇諭し玉ひぬ、時に阿難大衆の疑なきを知り、「世尊よ世尊、我等佛の敎敕を信受し、何等疑ふ所なし」と奉答しぬ

今や一切の大衆、佛陀の常住を信ずと雖も、北首西面右脇にして臥し玉ふ世尊を見て、何にとて憂愁の情無きを得んや、聲は彼より此に、此より彼に傳はれり、

「世間は空虛なり、世間は空虛なり、我等今より、主なく親なし、救なし護なし、歸なし趣なし、宗仰する所無く、貧窮孤露なり」と、或者は悲號啼哭し、或者は手を擧げ頭を拍ち胸を椎き、或者は身體戰慄し涕泣哽噎し、或者は口舌乾燥し聲も出てざりし、或者は互に手を執り地に輾轉せり、或者は全身毛竪ち徧體血を現はすと紅華の如きあり、或者は毛孔より血を流し地に灑くあり、高貴の夫人も威儀を忘れ、悲悼の極自ら頭髮を拔き卒倒せり、或者は兒童の慈母に別るゝ如く足を摺り懊惱せり、百二十歲の老婆羅門、須跋陀羅の如きは、世尊最後の敎化を受け、尊顏を瞻仰し佛足を頂禮し、「世尊よ世尊、恨むらくは我毒身久刼より已來、常に相ひ欺惑して、我をして長く無明邪見に沒し、三界外道の法中に淪溺せしめたり、痛哉々々、今世尊の恩を蒙り正法に入るとを得たり、世尊の智慧の大海は、無量を慈愍し玉ふ、竊かに自ら惟忖するに、累刼に軀を碎くとも未だ須臾の恩を報ずる能はず」と言ひ悲喜交々至り流涕自ら裁するを得ず、如來の前に身を擲げて地に投げ、荒亂濁心して昏迷悶絕しぬ、久しくして蘇醒し、涕泣嗚咽止め得ず、「世尊よ世尊、我今世尊の涅槃に入り玉ふを見るに忍びず、心中痛切にして裁抑するに難し、我れ自ら何ぞ能く此の毒身と共に住せんや、寧ろ世尊に先ち自ら入滅すべし、唯願くは世尊後に涅槃に入り玉へ」と悲泣し、懊惱し、地に宛轉しぬ

世尊徐ろに大衆に告げ玉はく

汝等當に意を開き、大に愁苦すべからず、諸佛の法皆爾なり、是故に當に默然すべし、不放逸の行を樂み、心を守り正憶念せよ、諸〳〵の非法を遠離して、自ら慰て歡樂を受けよ、純陀最後の供養を捧げぬ、世尊宜く

諸欲は皆な無常なり、故に我貪著せず、
欲を離れ善く思惟し、而も眞實の法を證す、
究竟して有を斷つ者、今日當に涅槃すべし、
我度に彼岸あり、一切の苦を出過す、
是故に今に於て者、唯上妙の樂を受く、
夜は已に半ばなり、……法界寂として月光澄み、……
……禽鳥聲無く、……娑羅林白し、……

＊　＊　＊　＊　＊

悲ひを止よ、愁るを止よ、今に佛陀の御聲あり、現に佛陀の慈悲あり、實に、眞に、佛陀は常住なりき、佛陀は佛陀在世の時のみの救濟にあらず、在世も滅後も西も東も北亦た南も、佛陀救濟の慈悲は平等にして無差別なりき、佛陀は常に一子地に住し玉ふ、父母は常に我等に好き衣裳と、好き臥具と、良き甘膳を以て將養し玉ふ、我等輕慢の心を起し、惡口罵辱するも父母は慈愛の心深く、決して瞋恨の念を生じ給はゞ、尙ほ我等に衣服飲食を與へ玉ふも、之を與へたりの志念すら有し玉はじ、我等病に遇ふ父母日夜四方に醫え求め、我等を救療し玉ふ、而も父母は苦とし玉はず、唯だ我等の平愈を祈り、我等の快愈を見て、父母は踊躍し玉ふ、此の一子地に住し玉ふ佛陀は、邪にも正にも、善にも惡にも、菩薩にも闡提にも、過去にも現在にも、果た未來にも、皆悉く父母の子を慈愛する如くなりき、佛陀の無常を言ふ者には、世尊在世と雖も佛陀は世に有らざるなり、佛陀の實在を意識する者には佛陀は常に現在なり

拘尸那城鶴林の中、世尊入滅し玉ふと見るは、小乘の學解なり、迷妄の見を以て覆はれ、信慧の眼無き者の言なり、海岸に二人有り、低地に住する者直に然体の隱るを知る、高丘に有る者今に然体を見つゝ有り、人あり明燈を覆ふ、愚者之を知らず燈已に滅すと思惟せん、而も明焰は滅せず、只だ知らざるを以て滅想を生ず、雲霧日月を蔽ふ、爲めに光を見ず、光を放たざるを以て日月無しとせば、其痴を笑はざる者無かるべし、淺薄なる小智を以て、加ふるに憍慢の塵雲間斷なき者何ぞ圓佛の日月を知らん、日西山に沈し天地闇し、去れど日月は有り、吾人煩惱の山障に圓佛の慈光を隱し、自ら求めて煩悶懊惱し、茫寞たる荒野の孤客となり、無味乾燥の人生たらしむ、去れば涅槃に於ける佛陀の解を見よ、涅は不又は無を意味す、槃は覆を意味す、煩惱に覆はれざる是れなり、亦た槃は去來を意味す、不去不來是れなり、亦た槃は新故を意味す、新故無きなり、新き者必ず故り故りたる者必ず亡す、槃は障礙を意味す、無障礙是れなり、吾人は肉に靈に障礙のみなり、佛陀は無障礙是れなり、槃は苦を意味す、無苦是れなり、吾人は東西南北皆苦なり、一切種智に於て無礙なり、是れ佛陀なり、心煩惱に苦しまず是れ佛陀なり、佛陀は美なり、佛陀は善なり、佛陀は實なり、佛陀は眞なり、佛陀は常なり、佛陀は樂なり、佛陀は我なり、佛陀は淨なり、如に非ず異に非ず虛空の如く絕對なり、佛陀は常住にして變易あるなし、而も虛空の如くならず、悲あり、慈あり、非滅現滅非生現生以て一切を濟度す、是れ相對なり、是れ不可思議なり、而も實相なり、眞實なり、佛陀は畢竟吾人の所謂る生滅なく、常に摩訶般涅槃に住し玉ふ　（未完）

革めすべき現代の日蓮宗

金澤　紀野　俊耀

吾人は日蓮聖人の教風を崇拜する者也、而して現代日蓮宗の滅亡を祈る者也、如斯云はゞ世人或は吾人の言の矛盾甚しきを嗤はん、然れども想へ、現代日蓮宗の信仰の内容は、如何に迷信を極め邪信を鼓吹しつゝあるかを、吾人は彼等を以て、世界の教傑　佛教統一の大革命者、大聖日蓮の法流也と揚言する迄に、大膽と勇氣とを有せず、若し夫れ現代日蓮宗の全盛を謳歌するものあらば、去て天理蓮門の徒と共にせよ、法華經と日蓮上人と吾人とは則ち與らず、憐むべし、現代の日蓮宗は今や腐敗墮落の頂天に達せり、主義なく氣骨なく、殆と病巳に骨に入れる重患が、百瘡千孔の形骸を抱きて、氣息奄々死に瀕せるが如くならずや、回顧すれば六百年前大聖日蓮が、星月夜鎌倉の十字街頭に立ちて、大聲叱呼佛教の統一を唱へ、信仰の覺醒を叫び、如來使如來の事を行ずと宣して、闘諍堅固白法隱沒の陣頭に踊り出て、大義名分に迷へる當年朝野の國

民を警め、本尊統一の大事を沒却して、散漫放逸の信條を許せる、諸宗樓迹の邪義を折伏し、以て妙法統一の法憧高く翻したる、旗鼓堂々、主義あり、主張ある豪傑雄大の遺風今や何れの處にかある

あゝ大聖日蓮が、法皇釋尊の敎勅を末法の天に奉じて、敎法の濁濁を一洗し、「先づ生前を安んじて更に沒後を扶けん」との大理想に依て實現せる統一的宗敎は、星霜の推移と共に變轉し去て、憐むべし或は卑賤醜陋なる淫祠的邪敎と化し、或は無意義に經典を妄讀し、祖訓を輕視し、名を口傳秘傳に托して莊嚴已義を專らにし、曲會私情を恣まゝにす、其他世人を誑惑し愚婦を蠱毒するの宿弊積惡擧て數ふべからず、之が爲に世人をして聖祖を誤解せしめ、法華を輕んせしむるは勿論、遂に彼の淫祠妖敎たる天理滿門の邪敎と同視せらるゝに至る、今や彼等の爲に、聖祖の大主義大理想は次第に其光を滅して、將に地を拂はんとす

聖祖曰く、「我が弟子の中にも邪義を云ひ出して、日蓮が弘通の本意を云ひ失ふものあるべし」と此嚴誡に當る者夫れ彼等にあらずして又誰とかせん、若し夫れ聖祖の今日に出現せば、曾て敎法革新の爲に放たれたる四大格言は、今や迷信の毒に中りて本心を失ひつゝある彼等に向て、逆に無間天魔亡國國賊と絶呼し給はん耳

あゝ永き昏睡より醒めずや、日蓮宗の青年よ、曾て聖祖が佛敎統一の爲に熱せる血は、今や卿等の血管に逓はずや、「鳥と虫とは鳴けども涙出てず、日蓮は泣かね共涙ひまなし」と云ひし、慈悲の熱涙は卿等の涙道に潤ほさずや、此の熱烈の血と涙なくして、百年經を誦んと萬年佛神を禮するも、尙蟬の鳴くが如く偶人の禮すが如けん耳、聖祖の所謂「死せるものゝ手に弓矢結び付、ねごとせるものに物を問ふが如し」との警めを恐れずや

若夫今にして敎風を革新し、祖道を復古するにあらずんば、聖祖一代の大化も、後五百歲廣宣流布の佛願も、果して何れの時にか成滿するを得べき、嗚呼革新なる哉、革新なる哉、然らば如何にして、現代日蓮宗の濁濁を革新すべきや、吾人は先づ第一着歩として、現今の一大弊害たる、淫祠的信仰を一掃せざるべからず

試に眼を日蓮宗の信仰界に放たんか、聖祖立宗の大綱格たる、三大秘法の根本敎義に向て、淸新熱烈の信念を捧げつゝあるもの、其れ幾人かある、或は鬼子母神を以て、信仰の正境として現世祈禱に狂奔し、法華

の行者を守護すべき使命を帶びたる善神と、行者自身が、據て以て安心立命の標榜として崇拜すべき、唯一本尊との區別を沒却し、恣まゝに御祈禱本尊と僭稱し、彼の入行祈禱者と稱する者の如き、冬寒百日の水行に、蓬如亂髮し、聲々嗄し木鉦を振ひ、讀誦助行の宗格を排せずして、陀羅尼を妄讀し、無意義なる呪語を濫唱するが如き、或は樹木に七五三繩を張り廻して、神など稱して崇拜せしむる等、實に沙汰の限りならずや、聖祖一代の化儀末代今日の龜鑑たる、聖人遺書の何れに、かゝる邪義を許せりや、實に彼等の行ふ處佛在世の苦行外道に殊なるなし、佛陀大集經に試みて曰く、「佛法實に隱沒せば、鬚髮爪皆長く、諸法も喪失せん」と、聖祖は曰く「或は冬寒に一日三度恒河に浴し、乃至一切の木を禱す、此等の邪義其數を知らず」と斷々乎として破折せらる、實に彼等の邪義者の遺訓に適中す、況んや彼等祈禱驗者なるものゝ人格に於ては、世間の道德的制裁の繩を脫する者すら、尙曉天の星の如くなるは、世人の已に知る處ならずや

聖祖は曰く「日蓮幼少より今生の祈りなし」と、然るに彼等は如上の邪行に依て、死靈、生靈、野狐の落ちたりなど稱へて、淺薄なる御利益主義を鼓吹し、益々迷信を助長すと雖も、彼等の如き野狐狸等の、一種の業通に盲信する輩は、到底佛敎の大不思議界に入て、無上菩提の彼岸に達する事、全く不可能也と斷言するに憚らず、如斯は敢て佛法の祈禱に依らず共、當時世間に流行せる催眠術尙能く、より以上の効果あらん、聖祖はかゝる不思議を喜ぶ輕薄なる輩を叱責して曰く

「彼の眞言の流偏に現在を以て旨とす、所謂奇瑞を以て本尊とし、男女の愛法を祈り、莊園等の望を祈る、如斯少分の驗を以て奇特とす、若し之を以て勝れたりと云はゞ、月氏の外道等には過ぎじ、若し彼の變化の驗を信せば、外道を信ずべし」と嚴判嚴として犯すべからず

如上の祖判に、奇瑞を以て本尊とすと云へるは、池上の長榮稻荷、身延の七面等ならずや、亦少分の驗とは、中山驗者の狐狸專門の祈禱にあらずや、聖祖はかゝる迷信濁信の徒は、去て外道を信せよとの嚴誡、肝に銘じて忘却する勿れ、あゝ身延山は、聖祖入滅前九ヶ年本門法華の妙義を宣示し給ひし眞の靈山也、池上は大聖鶴林に入らせ給ひし、事の寂光土也、今や日蓮宗の根本道場たる兩山は、變じて誇法濁信の魔山と化し了りぬ、日蓮宗徒何の顏せ有つてか、死して聖祖にまみ

へんとかする、思ふてこゝに到れば悲憤胸に逼り、暗涙眼にあふれて、筆馬爲に進まず、あゝ

以上述る外、數多の神佛を勸請して、或は御圖、加持、御水、御洗米と稱して濁水麁米を與へて病患を治すと誑惑し、或は曲會私情の、御圖書片手に世間の諸事を未敎に知ると僞妄す、其他背經違訓の邪義、列擧に遑あらず

能化者たり、導師たる僧侶にして宗義の何たるかを解せず、利養に貪着し、頻りに迷信を鼓吹すると共に、信徒も亦悉く、賤劣なる御利益主義に迷へる者のみにして、一も眞正敬虔なる信仰家を見出す能はず

僥倖的精神、即ち投機的觀念は、國家經濟の上に於ても、亦風敎敎育の上に於ても、大害ありて其終の最も恐るべきは世人の悉く見聞する處ならずや、而も我等日蓮宗徒の迷信的崇拜物に飯命しつゝある、多くのものは、何者を意識して崇拜しつゝありや、其驕る處、國運の隆盛發展にあらず、正法の廣布活動にもあらず、曰く商賣繁昌、曰く安產守護、曰く徵兵忌避、曰く何、曰く何、と凡そ百を數ふるも、悉く現在的、投機的、非國民的、劣情的ならざるはなし、然りと雖復實に是れ凡夫自然の心靈上の缺陷也とす、如斯迷情凡慮は、高等敎育ある人士の間にすら尙此を見る、況んや敎育なき愚夫蠢婦に於てをや、而も本化一流の活宗敎の流れを汲み、世道人心の高潔を訓ゆべき天職ある、彼等にして却て依經に背き宗祖に悖り、恣まゝに佛体を弄して迷信を助長する、現代日蓮宗僧侶の罪惡は、獨り日蓮宗敎風革新の大敵たるのみならず、併せて社會風敎の蠹賊たり、皷を鳴らして責めずんば已まず、想ふに現代の日蓮宗の現狀は、實に動物崇拜也、鬼神崇拜也　英雄崇拜也、古物崇拜也、口傳崇拜也、其信仰の內容が、如何に無意義にして散漫なるかは、智性の判斷を以て見る時は、勞ひ將に狂的たり、病的たり、盲目的たる也

嗚呼聖祖日蓮は、斯くも亂雜なる、無定見なる、醜劣なる信仰は敎へざりし也、聖祖當年の信徒は、今日の如き狂亂信徒にはあらざりき、否吾人宗徒が仰て以て信仰の南針とせる、經文祖判は凜乎として、今日の如き婬祠妖敎の惰風を叱責し、狂亂虛僞の信仰を折破しつゝある也

吾人は六百年前の師檀の芳蹟に鑑み、經判の洪訓を奉じ、銳意吶喊以て淫祠的信仰を打破し、佛祖の眞光明を發揮せざるべからず

由來今日の如く、淫祠の風滔々として日宗の天地長へに闇黑なる所以のものは、宗祖の遺訓に背きて、本尊巳外の散漫たる對境を許せるに依る、宗祖の所謂「實敎の文を會して權敎の義を解する」者にあらずや、されば日宗の革新たる、先づ淫祠的信仰を一掃すると共に本尊の一定確立を計らざるべからず、宗祖曾て曰く「諸宗は本尊に迷ふ」と、されど日蓮宗現下の狀態は、殆ど此の訓言と正反對の現象を呈しつゝあらざるか

聖祖は、本門壽量の本尊を以て、一宗趨皈の本尊の定められ、一閻浮提第一の本尊此國に立つべしと云ひ、本尊とは勝れたるを用ゆべしと嚴訓し、此の本尊を以て日蓮門下及全佛敎徒が、究竟安心の標的と定めたるは獨り日蓮聖人の自義にあらずして、實に法華本門經王の遺訓を遵奉したる者也、聖日蓮曰く、「是れ全く日蓮か自作にあらず、多寶塔中大牟尼世尊分身の諸佛すりかたぎ(摺形木)たる本尊也」と

若夫れ日蓮門下にして、此の唯一の本尊を輕視し、散漫放逸の信仰を勸ひる者あらば、之れ實に城者破城の者也、法山の綠林佛海の白浪たるを免れざる者也

吾人は重ねて云ふ、日蓮宗の革新は、淫祠的信仰を打破するにあり、唯一本尊より他の迷信的崇拜物を徹退するに有りと、あゝ斯如して始めて日宗の天地に光明を見、正義的發展を見ん、日蓮宗の高僧諸氏、此の義を了せりや、終りに臨て一言す、曾て日蓮宗の碩學守本文靜氏、三十七八年の役同宗從軍布敎師として出發するに際し、熱烈の道念より出でたる、同宗革正條件五ヶ條を擧げ、本尊統一、迷信の排除を同宗管長に諫疏する處ありき、實に同宗革新の先覺者たり、而も彼等道念微弱にして、今尙同宗に何等の新曙光をも認めざるに至つては、日蓮宗信仰の、將來の運命に就て轉た寒心に不堪也、さもあらばあれ、迷信濁浪中の同宗に此人あるを見る、恰も大闇の中一道の光明を認ひの心地す、願くば百の守本師、千の文靜師、起つて日宗の危機を救へよ、日蓮門下正信の徒が叫ぶ、革新の聲は社會進化の潮流と相俟て、彼等僞日蓮宗徒を閉塞せしめざれば已まざるべし

(完)

寄告

清瀨師の「大國民の資格を造れ」と題する續稿、本月掲載致すべきの處寄稿輻湊に付餘儀なく次號に讓り申候又關田佛城子の物せられたる「自我偈講話」は安心決定の資料として次號より連載致すべく候

編輯部

候べく候

青村

圓友諸君

別に大した事にも無之候へども、東京の近況二三報道致し候べく候

御承知の如く東京八講十講なゞ申すものは、出開帳の取持を一種の營業の如く心得、池上の會式に萬燈押し立てゝ、どんぢこ法華の濁音高く、信心とよりも寧ろ狂氣染たる團体に候が、何に感ずり候てか、噂によれば四十五年の博覽會までに、是非本門の戒壇を帝都に建設すべしとの事にて、中々の意氣込に候よし、而して戒壇建立までは出開帳の取持を一切拒絶して、全力を此事業に傾注し、いよ〳〵戒壇建立の曉には、例の名倉屋の本尊(佐渡始顯の曼荼羅)を奉安するとの事に候、目下大分談は進行候由に候へ共、日宗保險會社に關係ある或御前樣の反對せりとかにて、此坊主其儘では置かぬと敎圍き、講中世話役と御前樣との間に激烈なる論判中との事に候、御前樣が負けて戒壇が美事出來上るか、夫とも講中が負けて戒壇がフイになるか、茲處隨分と見ものに候べく候

何方が負ても勝ても、お互直接の影響は毛頭無御座候へども、小生の存寄にては、此相撲、なる事ならば講中を勝せたき心地せられ候、何となれば、多年統一團と師子王文庫との挾擊に遭ひて、出開帳の景況近頃滅切骨の折れる一方となり、實入りは一雨々々に細り行く心細さに、多少覺醒の萌芽しつゝある矢先、所謂齊一變すれば魯となるの時運に候へばに候

兎もあれ、講中が勝ちて戒壇が出來上れば一段の珍重に候はずや、譬はゞ呑む、打つ、買ふの三拍子揃ひし道樂子息も、一朝改心して眞面目に働けば、傾きし柱も再び立て直すが如くに、馬鹿騷ぎのどんぢこ連中も、時代の推移に飜然として其迷妄を覺醒すれば、中々の大勢力となり候べく候

況んや柴又の帝釋とも中山の鬼子母神とも言はずして假にも名倉屋の本尊を奉安するの儀、一般と神妙の心

掛け賞めてやらざなるまじく候、唯憂ふる處は、折角戒壇を築き上げ折角結搆な本尊を奉安した曉に、又候本尊一幅では何だか物淋し、何か前立を何か脇士をと鬼子母神、帝釋、妙見、清正公、妙法二神、さては池上の長榮稻荷もと、何日の間にか道戻りはせぬかとの掛念計りにて候べく候

次には一月廿五日築地本願寺に於て開かれたる、眞宗本派の勸學島地默雷翁七十の賀宴に就てに候　觸れ出しは明治佛敎界の元勳、泰斗たる翁の、古稀の高齡を迎へられたるを賀するとの大風呂敷にて、各宗知名の高僧さては朝野の名士數千人、づらりずらと連名の案內狀を數千通發したりとの事に候、而して其發起人中には日蓮門下知名の僧正が御兩名迄も、確かに麗々しく列名あらせられたりとの事に候、其會が盛會なりしか否、默雷翁がそんな偉さお方なるか否、及び各宗の先生達が此會を開かるゝの當否等、そんな事は別に論ずる限りに無之候へども、苟くも精を日蓮聖人の門下にかゝぐるものにして、四個格言の否認者たる當年の默雷和尙を、如何に健忘性の國民とは云へ、物敷寄にも左程まで隨喜渴仰めさるゝとは、是は又異なものと存ずる迄にて候べく候

之を善意に解釋すれば、兩僧正の此會に加盟せしは、ゆめ〳〵默雷翁に隨喜せしにては無之、全くの處十年前各宗綱要編纂の當時、四個格言を否認せし翁の不學と執拗とを愍然と思ひ、寧ろ此機を利用して翁を說破し、依て以て日蓮聖人の說に降伏せしむべく曉喩し、若し叶はずば幾久しく翁をして其健康を保たしめ、依て以て聖敎の研鑽を積ましめ、せめては終焉の際までに四個格言を是認せしめ、阿鼻の苦果を免れしむべく、誘引接化の格より出てたるものとも考へられざるにあらねど、さて退いて兩僧正平素の言行より觀察する時は、そんな氣骨とか慈悲とか申す談道は思ひも寄らず候、やはりか單に、交際上手お世辭の安賣より出たる盲動としか受取れず候、或は今一歩を進めて申そうならば、僧正等衆ての心中を忖度するに、一念佛無間なぞ聖祖が餘計な事を仰せ置かれ候ため自分共の世渡り

にいかう邪魔になり申す」「日蓮聖人は祖師にては候へども餘りに强し我等は柔らかに法華經を弘ひべし」との御存念かと察しられ候、其證據は大事の御本尊を保險會社の看板に用ひられたるにても分明に候べく候

此筆法より推斷するときは、廿五日の賀宴に列席せられしは、或は身延池上と兩本願寺との緣組内談、今一層廻實して云へば、念佛題目の合資會社を設立する準備に利用せられしかも知れず候、何でも會社を起せば權利株が貰へるからにて候べく候

團友諸君

要するに日蓮門下の各本山の所謂御前樣達は、無氣力無節操にて候、骨拔鱈にて候　瓢簞鯰にて候、お賽錢の爲めには狐狸の穴をも拜ひものにて候、現金が貰へれば門跡さんの肛門をも拭ふものにて候、交際の爲とあれば彌陀藥師を拜ひは勿論アーメンをも唱へ兼ねぬ者共にて候、十年前の格言問題をも念なふ忘れたる老耄にて候、龍口法難を否認せし重野博士に一矢をも酬ひ得ぬ腰ぬけにて候、僧正僧都とは決して名譽ある僧官にては無之、何れも鞍馬山の天狗の眷屬にて候、されば之そ紅ひ袈裟をかけて鼻高々と力み居り候、彼樣な連中と宗門の統一を相談するは、相談する方が餘程間拔の骨頂にて候、げに妙宗主筆の田中先生が「やつきし」となるのもさら〳〵無理ならぬ次第にて候べく候

團友諸君

されど佛法は未だ地に墜ちず候、日蓮門下各教團の何れにもが確かに革新の機は動き居り候、時代は何日迄も盲動を容赦すまじく候、やがて統一團の統一團たる實を擧げ得る時機醇熟いたし候べく候

團友諸君

その革命の機運の那點に動き居るやを今語るべく候、それは現實に夢幻の名譽に醉へる老人株にては、ゆめ〳〵無之候、無名の精神家によりて隱約の間に會盟せられつゝある團体の一角と、今一つは熱烈至誠なる青年學生とに候、然も後者の方前者よりも多大の望あるべく候、有体に云へば、從來學生として教校に在りし時革命の理想を抱懷せしものも、一朝學成り業終へて師跡を相續するが最後、忽然骨拔鱈となるもの十中の八九にて候、其覆轍に鑑みて固陋頑迷なる師僧よりの學資を全然固辭し、成業の後は決して寺院に住せず獨立生活をなさん、かくて何等制肘の虞れなく宗門の統一に貢献する處あらんと、確實なる理想信念の下に自他相戒めて螢雪にいそしみつゝある青年團体にて候、此團体の根據地は今は憚る處ありて公言致さず候へども、小生の居所を隔つる遠からざる或る場所にて候

團友諸君

正義は最後の勝利者にて候、而も其最後とはあながち遠き未來の事にては無之候、我等の眼の玉の黑き間に屹度來るべく確信致し候、多幸なる團友諸君、乞らくは健在なれ、まづは是にて報道の筆止め候べく候

嗚呼本光院日稠法師

樂本子

師諱は日稠、字は完亮、本光院と號す、俗姓吉田氏、明治三年七月十七日加賀國金澤に生る、資性寡默にして果決、父は金澤藩士、その名は明卿、師をして吉田氏を襲はしめんとす、師惟へらく我れ蒲柳の質、敢て劇甚なる俗界の生に適せずと、仍ち發願して、本妙法華の高德故日完に投じて薙染す、時に明治十年師年甫めて八歳、爾來螢雪の効を積み、同十四年京都府宇治の小栗栖宗學林に遊び、高等二年文句部に進む、後ち宗義の精要を探ぐり、遂に師日完と俱に本宗に歸入す、同三十三年四月本宗正教師と爲り少學統に補せられ、備前知氣の本成寺を董すと五年、その間、日清戰役に於ける忠魂弔慰の爲めに同寺境内に一大忠魂碑を建設し、毎歳招魂祭を營み、官公吏遺族者を參拜せしめ、以て恒例とす、又新たに梵鐘を鑄造し兼ねて大藏經を購入し、大に教導感化に努め、僧俗同信會を始め婦人會、青年會を起す、明治三十五年十月功を以て中學統に進む、同三十七年八月東都より小林、本多兩大僧正を請じて本宗西部夏講會を同地に催ほし、會期中同寺の境内に浴室を設けて特に作州鷲温泉を湛へ以て會衆を優待す、是れ實に師が獨力經營する所のものたり

翌明治三十八年一月師京都府綾部町了圓寺に轉住す、是より先き師赴任の前年大火あり、仝町の民家四十餘戸を燒く、時に了圓寺表門を始め寺有屋舍等類燒に罹る、師任に赴くや、固より之を無關に附せず、輙ち惣門の再建を企て、己に起工して今や竣成の期に近けり

加之偶ま本宗教學財團設立の擧あり、師自坊經營の中に在りて亦た財團基金の勸募に盡し、優に規定の功勞章を受くべき資格に達せり、師の努力想見すべきなり

且つや仝町は多年迷信の餘毒に感染し容易に純正の信仰に復し難きものあり、師頗る之れが矯正に盡瘁してその成蹟大に擧る、その他三十七八年役戰死殉難者の追弔、客年八月仝地方洪水被害者の慰藉、その横死者の追弔等、孰れも懇篤に弔慰し　殊に仝地方に近年基督教の勃興しつゝあるを見るや、師は彌よその活動を勵み、已に舊臘十五日を以て翼基督教大演說の開會を企て、その會合を振はすべく特に大阪より洋樂器又は蓄音器を購求し、準備着々進捗しつゝありし際、期に先だつ三日、俄然腦溢血に襲はる、師自から將に起つ能はざるを覺り、後事一切を尊屬親に托すべき旨を傳へ神色自若、些の苦痛なく泰然として唱題摩裡に遷化す眞に佛子の面目なり世壽三十有八、法臘三十一、時に明治四十年十二月十二日午前八時半、嗚呼悲哉、故舊檀越成な師の遺逝を惜む、況や近親をや、

茲に於て翌十三日師の嚴師（俗緣の令弟）井村僧都導師となり茶毘式を行ひ、同月十五日大導師本宗管長本多大僧正貌下、副導師本山部長野口僧正統理の下に莊重なる正葬の儀式を營む、即ち吾宗門は宗規に依り師の功績に對し特に僧階二級を超越して大學統を贈る、師逝くも尙餘榮ありと謂ふ可し、その辭令の文に曰く

京都府了圓寺住職　故　吉田完亮

中學統

敎學財團に對し功勞あり且つ寺門經營の計畫を立て護法の志念堅固なりしに依り特に僧階二級贈進せしめらる

明治四十年十二月十五日　顯本法華宗宗務廳

中學統　故　吉田完亮

贈大學統

明治四十年十二月十五日　顯本法華宗管長大僧正本多日生

尙餘葬儀に於ける諷誦文等を掲げん

（大導師の分）

勸　請

本門常住之三寶　來臨影響知見照覽

當山現住職完亮大德　本月十二日卒然遷化の飛報に接す　大德は當山住職已來日尙淺しと雖とも　孳々として敎導感化に努め　檀信徒擧て歸依渴仰せり　曩には敎學財團の勸募に當りて好成績を示し　功勞章を受くる資格と二階昇級の功績を有し　又近來寺門の經營を發企してその計畫既に熟し　地方の敎界に大飛躍を試むべき準備も復成れりしに　俄然急病を以て遷化す　寔に哀悼の至に堪へず　然　ども大德が護法の道念は宗門の均しく認むる所　依て宗制に依り二階を超越して大學統を追贈することゝす　又檀信徒は其高德を追懷して誠意誠心以て葬送の式典を擧ぐ　蓋し僧侶の本領を全ふするものと謂ふべく　大德復以て安んずべし　況や大德の護法の信仰と道業とは　佛祖一寶照覽の下に　今や無上菩提の大覺を證せんこと疑なし

經云　護法の因緣を以て此金剛の身を得たり　と

南無妙蓮華經

明治四十年十二月十五日　管長　日生

（副導師の分）

歎德一章

南無本門壽量之本尊　別しては末法相應之大導師宗祖日蓮大聖人　宗旨再興日什大正師　知見照覽哀愍納受

失以れは水は流れて還らず　露は結んで停まらず

日出でゝ早く沒す　金剛不壞の釋迦牟尼世尊も跋提河邊に遷滅の儀式を示させ玉ふ　人生何れの處か常住ならんや　今所吊　上人の一期を案ずるに　上人は明治三年七月十七日加賀金澤に生れ　父は同藩士吉田明卿　父上人をして吉田家を嗣かしむ　雖然上人資質蒲柳　世路の風波を厭ひ　年八才自ら發願して佛門に入り　籍を眞門立に置く　後本宗の敎義を修め　其師簡井日完と共に本宗に歸入す

明治三十五年和氣本成寺に在りては　奮て大藏經を購ひ　梵鐘を鑄造し　僧俗同信會を起し　衆て婦人會青年會を組織す

明治三十八年當寺に晉山してより已來　專ら敎式を紀し信仰の純正を規し　說敎法談演說等其最も勵むる所なりき　又寺門の荒廢を歎き　惣門の再興を企畫し　今や工事其中はに達せり　又敎學財團の勸募に盡し最好成績を得たり　管長は其功績を賞し大學統を贈れり　從是將に大に爲宗旨規畫發展せんとして天年を假さず遺憾として遷化し玉ふ　嗚呼惜哉

是又人世の無常を示されたるものか

昔し酒に醉て出家の眞似せし婆羅門天に生れ　戲に袈裟を着せし優婆塞阿羅漢の位を得たりと　況んや眞實の出家をや　況んや法華本門の導師に於てをや

又聞く　一人出家せば九族天に生ずと　出家の功德豈廣大ならずや　今所崇本門壽量の本尊　所修三大秘法の南無妙法蓮華經　此功德に酬ては　速に靈山淨土に往詣し常住圓滿の覺月を詠めんこと無疑

乃至法界平等利益　仍て一章如件

明治四十年十二月十五日　本化沙門　日主　敬白

吊　辭

十二日電報の辭あり　出でゝ見れば　何ぞ圖らん「クハンリヨキウビヨシス」てふものを手にして　余は呆然として暫く云ふ處を知らざりき　嗚呼　君よ君の去ること何んぞ夫れ速かなる　過日は宗會議員選擧の件に付　君は書を余に寄せて　余の意見を徵し打合を爲したるにあらずや　加之本月の統一團報には　君の赴任後萬障を排して幾多の改善を圖り種々の事業を擧げたり　就中敎學財團の淨業寺門改築の大業等　着々君の理想を行はんとせし事を列記したるものを見たりき　この時の余の喜びは幾許なりしぞ　君は壯健にて孳々として經營に怠りなく敎義の發展にも盡力せらるるを知り　余は病中ながらも

大に安心せり大に君もヤッテ居ると思ひて感服も致せり　然るに俄然としてこの訃音に接す　豈驚きて倒れざるを得んや　君よ　君は忘れたるか　君昨年余が病床を親しく見舞呉れられたり　其際余は「余死せば電報を打つから　必ずすぐと來て下さい」と頼み　且つ約束せしにあらずや　然るに今や余を置いて先んぜられたり　嗚呼人生の問題茲に於て乎益急切なるを知る焉　了圓寺は今やこの空前の適任者たる良好の住職を失ひたり　余は今吉田君の遷化を痛惜して置かざると共に　了圓寺の爲めにも亦惜みて痛まざるを得ざるなり　君よ　君にも大に爲さんとするの理想も在りたるならん　余等の希望も君に負ふ所のもの多かりき　少くとも了圓寺の中興として大に基礎を鞏固にせられんことは　瞭然として明かなりと信じ居たる也　この我々の希望　宗門の希望　親子兄弟の希望　檀信徒の希望　擧すべれども實に多くの希望を　君は君の兩肩に擔ふて居られたる也

この多くの希望や多くの經營抱負を有して　君は俄然として遷化し玉ふ　實に惜んで猶余りあり痛みても猶足らざる也　余は病中にて一層の同情に堪へざる也　人生悲慘の事多しと雖も　志を抱きて中年にして斃るゝ程悲慘の事はなし　實に悽愴斷腸察するに餘りある也

然れども君は當に汲々として教義の發展に努め經營事業に熱中せり　今や急性に斃るるも所謂る本職に斃れられたる也　本分を盡して死せられたる也　實に敬服の至りに不堪也　嗚呼今や君の遷化に會ひ骨肉血縁の悲嘆は勿論　檀家一同の痛惜して措かざる所なれども　君は君の本分に斃れたる也　理想を實現せんとして死せる也　然らば則ち君も亦瞑目せられて可也

君よ　希くは本佛教尊に咫尺し奉り悠々として如來如實の知見に透得して　徐ろにこの宗門を保護せられよ　亦この了圓寺の前途をも守護せられよ　聊か余が赤誠を纖述して以て弔詞に代ゆ

君が靈位　希くは來りて饗けられよ

明治四十年十二月十四日　大阪蓮成寺　僧正　清瀬日憲　敬白

弔辭

維時明治四十年十二月十二日當山住職本光院日稠上人遷化せらる　偖ら上人生前の遺績を考るに　上人は當山就職以來法務の勤勉布教の弘張寺院經營等に晝夜を分たず刻苦奮勵大に其發展を期するに當り未だ半ならざるに不幸中折せらる　嗚呼悲哉　茲に佛天三寶護法列位の諸天善神を請し奉り　併て管長大僧正本多日生上人猊下の親臨を仰ぎ　本日を以て送葬の儀式を擧ぐ　我等檀徒一同愁傷悲哀に堪へず　然れども上人が當寺の爲めに盡されたる淨業は　永く朽ちざるなり　尚くは饗けよ

了圓寺檀家總代　蘆田　新右衛門

弔辭に代ふ

たらちねの親や召すとて法の子が
わしの御山へいそぎけるかな　眞月

吉田尊師の御遷化をかなしみて

檀家　森本　德兵衛

いく千代も圓居語らむ法の師と
おもふよし田のなき世かなしき

かくて師が生前に計畫したりし佛教大演說會は、追悼的意味を以て葬儀の翌日仝町劇場長樂館に於て午後七時より開催せられ、十七日には師の初七日忌を營みて管長猊下の法話ありしといふ（葬儀等の詳況は載せて本誌雜報に詳なり）

惟ふに現代我國に於ける倫理思想は、墮極なる個人主義に感染し、僧も俗もなべて變調なる惡影響を受けつゝある間に於て、毅然として能く本宗僧侶の本分を盡くし、以て他を激勵せしむるに足るべき功績を遺せること、今の日稠法師の如き人、夫れ幾人かある。師や吾が教界に在るの日敢て久しと爲さず、而かもその遺せる所の功績決して少なしとせず、而して幵は皆已に他の模範となり現に光を放ちつゝあり　況や師年壯、今後彌よ益す活躍せんと企てつゝありしもの夫れ幾許なりしか、若し夫れ師に假すに尙ほ十年の歲月を以てすることを得たらんか、必らずや師が齎せる理想は着々實現して、定めて多大の光輝を倍增すべけんなり、されど、されど、師已に逝きぬ、嗚呼悲哉、思ふて此に至れば哀悼の感切に深し矣、豈に惜みても惜むべきにあらずや

上來不文を草して聊か予が見聞せる所の、師が生前の功績の幾分を傳ふることとはなしぬ、今擱筆に臨み虔て茲に師の神靈に告ぐ、曰く、今や師は、親たり靈山の慈父に奉侍するの幸榮を得たまへり、當に宜しく狀を具し、萬の完亮、億の日稠を續出せしめたまへと奏せられよ、本佛世尊焉ぞ加被を垂れ玉はざるべき、懇祈至囑

南無妙法蓮華經

雜報

●總本山大法會と西部講習會等　來る四月上旬には總本山妙滿寺に於て、第二回西部講習會開催の豫定にて引續き教學財團評議員會を招集さるべく、又中旬には例年の總本山大法會を催ぼされ、兼ねて日奉上人の四百遠諱をも執行せらるといふ、本宗西部各教區布教師並に有志の諸師は今より講習會聽講出席の準備あらせばし

●茗谷學園の宗義研究會　豫報の如く一月十九日には新年初會を催ぼし當日講演後宴會あり、山田、松本、戸田、木村、谷等諸子の所感演說あり、本多講師の挨拶等ありて頗る盛會なりき、又本月の例會は九日に催はされ、本多講師は本尊論の餘論として優陀那師の本尊

畧辯に於ける心底の迷惑に對する講評ありき、次回は三月一日に開く都合なり　因に同園の木村龍寛君は來る四月頃より印度チタゴン大學に留學し、約十年間の見込を以てパーリ語又び南方佛教を研究すべしと、又同園の松本某外一名も近々渡米留學の計畫ありといふ祝すべきことにこそ

●千葉縣二教區寺院の新年宴會　日露事變以后遠慮し來りし全教區の新年會は、今回再興せられ、今井、小高、吉田、竹内、中村各師發起となり、月の廿六日八幡町圓頓寺を會場とし開筵せらる、當日會する者山本、井口、廣部、山形、鵜澤、齊藤、小池等各師の外數名、中村師開會の辞を宣べ、盃盤の間宗門興立教區の圓滿を企圖せる種々の妙說出て、清談快飲日沒前宗家の萬歳を祝し散會したりしは喜ばしき現象と云ふへし(伊保内生)

●品川妙蓮寺の特志法要　品川の池田屋とし謂へば、近世本宗外護の大檀越として普ねく人の知る所なるが其已前に品川に木倉屋又兵衛といふ、本宗外護の先驅者あるを忘るべからず、同氏は素と眞宗の信者なりしが、一朝本宗の教義を信ずるより愛子を僧侶になし、又本山經營の爲に其頃文字小判二百十兩を献じ江戸門中へは金三十兩を納めたる等その功績擧げて數ふべからず、現に品川妙蓮寺の本堂は、全氏の建立に係るといふ、而して本月六日は同氏の百回忌に相當するにより菩提所妙蓮寺住職笹川眞聽師は其功績を追懷して特に同氏の遺族を招待し、嚴肅なる法要を勤修せられたり、因に同寺に功績ある檀越に對しては、今後も特にかゝる追弔會を修すといふ、奇特と謂ふべし

●教女會の設立　世の進歩につれて、指導者たるべき宗教者の任務の重大なるは論を俟たず、而して其内助たるべき妻女の勤めも亦中々に重くして、普通婦女子の尤も望みとなす虚榮心の如きは、彼等は絶對に排斥せざるべからず、且つ常に不足勝なる財政を辨じて夫をして後顧の憂なく安んじて布教場裡に立たしむるには、少なくとも、其道念、品性の涵養に依らざるべからずとて、我京都にては、一野口僧正發起として京都寺院住職の妻女の一團を集めて、教女會なるものを組織し、毎月一回講演會を開く事となり、客臘廿七日を以て本山に其れが發會式を行ひ、引續き一月より開演せり、是れ尤も必要の事にして東京及ひ千葉縣の如き本宗寺院の多き處は、一層斯の如き會の興らん事を望む(京都川崎英照報)

●村上貞藏翁の還暦　本宗總本山の信徒總代として教學財團の評議員として、夙に護法篤信の譽高き、堺市の村上貞藏翁は、今や已に耳順の境を越へて、本年は還暦の賀年を迎へられ、去る四月節分に方りその祝宴を催ほさる、今記者の許に得たる消息を抄録せん、曰く

本日(二月四日)は、我等一家に取りては、如何に幸福なる吉辰ゆ、正に是れ　佛祖の加護を得て、斯か

る吉事の重なること、思へば歡喜法悦に堪へざるなり

本日は三男信雄が小間物商の開業、五男孝の妻千代が男子安產、貞藏は還暦の節分、三つの祝事一時に重なりけり

信雄開店、孝、子が出來て　貞
親達や還暦、祝ひ重々　寫
還暦に祝ひかず〳〵重なりて　寫
店開きやら、孫を產むやら　寫
いつまでも足元赤うよる年の
恙なかれと、祈る子供等
みせびらき、豆と酒とも鬼を捨
赤前掛がまれく、福の子　忠
ささくさの祝ひ重なる四一二四
小豆大豆さわぎなるかな　保

當夜は白髯の翁が赤の服裝もて飾り、一門男子四人前後を取卷き、定紋の紅提灯を携へて、先づ例の如く菩提寺に年參りを濟ませ、夫より同市内の賑へる社寺を行列の儘經歷し、歸りて大祝宴を催せりといふ、翁が樂觀的の消息は頗る愉快に記者を悦ばしめたるを謝す「法の爲め盡くす眞心あらはれて、ひかりそゆらめ赤きみなりは」

●綾部通信　第十四教區京都府綾部町、遠阪桃村君より仝町本宗了圓寺住職故吉田完亮師の葬儀及び演說會の狀況を詳報せられたれば左に掲ぐ

一、故吉田師の遷化　師は舊腦十二日朝俄然腦溢血に罹り即日遷化せらる、師は年齒僅に三十有八、今後宗門に對し盡瘁せられんとする有爲の師なりしに、一朝病の爲に倒らる悼惜に堪さるなり

二、師が生前の事業　吉田師住職以來日尚淺きにも拘はらず、寺門の經營、財團の勸募、及び布教等に盡され、其効果少からず

三、師の葬儀　十二月十三日實弟井村僧都を唱導師として、薄暮以久田村の火葬所に於て荼毘し、十五日午後一時本宗管長本多大僧正大導師とし、本山部長野口僧正副導師として、數名の僧衆等にて莊嚴なる葬儀を執行せり、親戚及び檀信徒は素より、町長、郡吏、學校職員等數百名の會葬者あり、何れも師が生前の德を慕ひ感涙に咽びぬ

因に仝日管長猊下の諷誦文、本山部長の歎德、清瀬僧公の弔詞(代讀)檀中總代の弔詞、赤十字社京都支部長の弔詞(代讀)其他各地の法友、親戚、舊知より數十通の弔電弔詞を代讀し、實に正儀式にて午後四時埋骨式を執行せり

四、佛教大演說會の計畫　昨春以來耶蘇教牧師は熱心以て傳道に從事したるが爲め、各宗の檀徒中數百名の洗禮を受けたる者あるに付、各宗同盟會は大に驚き、協議會を開き、加藤咄堂居士を東京より招きて、對外演說會を開きたるも其甲斐なし、然るに本宗の檀徒は一人の脱宗者なきのみならず、各宗同盟會の狂奔を惡み、且つ地方人士の迷路に墮落するものあるを救濟し正法に歸入せしめんとするの目的を以て、檀家、蘆田

新右衛門、大槻藤九郎、相原九郎兵衛、遠阪龍一郎、森本嘉市、大島嘉助の諸氏發起人となり、住職吉田師と計り、十二月十五日本多大僧正、野口僧正、能仁權僧正、原田敎師を招き、各宗の迷夢を覺さんとの計畫にて、其準備整ひたるに、十二日俄然吉田上人は遷化せらる、遂に追善演說となりしは返す〳〵も遺憾の極なり

五、追善大演說會　綾部町劇場長樂館に於て十六日午後七時より開會す、此の日雨なるにも拘はらず同刻よりひし〳〵操込みたる聽衆實に一千餘名と註せらる、本多大僧正、及び野口僧正の演說は、何れも其所論の正確にして、道德、敎育、哲學、歷史等の各方面より破邪顯正の立論は利劍を以て亂麻を斷つの慨あり、大に聽衆の耳目を淸掃し、信仰を增進したり、聽衆中二三の牧師ノー〳〵の聲を發したるは笑止なりき、當日の辨士及演題は

開會の旨意　國の爲、法の爲、衆生の爲め　墨譜生
佛敎とは何ぞや　佛敎より見たるゴッドの地位　野口僧正
本多大僧正
井村僧都

餘興として大聲蓄音器、奏樂等ありて午後十時半散會、今回の演說は實に綾部町未曾有の盛會なりき

六、綾部青年會と野口僧正　綾部町に於ては一昨年より風紀改良、學術修養、及び地方發展、山林事業を目的として青年會を組織し、現今會員百餘名に達しをれり、然るに今回野口僧正の來綾を機として、十二月十五日同師を聘して講話會を開きたり、全日午後七時開會、師は青年修養の題下に懇々約一時間半の長廣舌を奮ひ、青年の勇奮を求められ、何れも滿足に謹聽したり

七、初七日の法話　十二月十七日吉田上人の初七日法要を營み、午後一時より本多上人は、我此土安穩天人常充滿の一文に付、有難き法話をせられ、檀信徒百餘名に對し安心を與へ、信仰を鼓吹せられ、午後五時出發歸東の途につかせらる(二月二日綾部町遠阪桃村報)

●大橋布敎師の巡敎　廣島市本宗本照寺住職權僧都大橋日襲師が第十六、七敎區布敎師として九州地方巡敎の日誌を得たれば左に揭げん

九州地方巡敎日誌　布敎師　大橋　日襲

予に徒弟の約ある鹿兒島縣人塚田某の懇請を機として九州地方の宗敎視察を企て、去る十一月廿六日準備を整へ、當日檀徒深井守之助氏の例月法話會に臨み、出發の宴に送られて、全夜十一時十分下り列車に乘込み廣島を發す、下之關へは翌朝六時に着し、夫より早鞆の海峽を門司に渡り午前九時全地の舊知平田一郎氏方に着、午後四時より信徒を會して法話會を開き、(聽衆中日宗徒十五名、八品流三名)社會を救ふは眞正なる宗敎にある旨を說き十一時終了、——廿八日午前九時門司發、福岡縣八幡町に着す、此地は開港地にて吳市の如く、製銅所多く戶數二萬以上、多くは無宗敎者なり、幸に九州泰師の信徒柴田嘉平氏方に到り、全夜法

話二席、來會者二十六名、他宗徒多かりしも熱心に聽く、柴田氏と協議の上追て敎會所を設置せんことを約す——廿九日午前拾時八幡發滊車にて田川郡採銅所村に着す、銅山事務所に愚弟の在職するあり、工夫百三十余名に對し「飮他毒藥々發悶亂宛轉于地毒氣深入失本心故」の題にて二時間余演說す、夜又「信謗彼此決定成佛」を辯ず、會社長、事務長等に懇話す——三十日午前九時香美驛發、午後二時佐賀市着、全市には日宗觀正院、泰敎寺、正德寺、本通寺等あり、淨土宗中學林あり、權宗徒優勢なりと聞く、採銅所長の知友全地の旅館久保島保吉方に投宿して法話を試ひ、諸宗亡國論と日宗の迷信を責む、久保島氏は未だ信仰を有せざりしが、一場の法話に依りて吾が信仰に入れり、——全夜十一時佐賀驛を發し長崎に向ふ、久保島氏の添書に依り長崎市の吉川秀太郎氏を訪ふ、時に三十一日午前五時半、當日新兵の入營にて途中各驛共大に賑ふ、同日は吉川家に休息——十二月一日午後二時及び夕七時より二席の法話を開く、當市日蓮宗には本蓮寺あり各宗共に盛にして禪宗尤も優るといふ、幸に吉川氏の斡旋盡力に依り寄席を借受け、午後は「日本國の柱」てふ題下に、夜は「死身弘法」の題にて如說修行抄を讀みたる時は聽衆の感動深きを覺へたり、聽衆約百五六十名、中に數名の僧侶を見る、頗る盛會なりき——二日午前中乘船の都合なりしも海上不穩の警報あり、依て午後十一時發船、熊本縣三角港を經て三日午前四時鹿兒島縣米の津に着、是れより鹿兒島市まで陸路三十六里の山路を二日間馬車に乘り通ほし——五日午後三時に鹿兒市に到着す、此行途中交通の不便なる、言語の不通なる、共に甚だ困難を感じぬ、當市は數百年來廢佛の風習あり、維新後漸く眞宗東西兩派の別院を新設し、日蓮宗は數年前本妙法華宗の某僧布敎し、次て日宗の敎會を設くるあり、さて塚田其他六七名は予を迎へて塚田家に導く、全夕塚田方にて法話——六日は光隆菴にて公開演說を催す、各信徒熱心斡旋の結果五十余名の聽衆を得、唐突の開會にも拘はらず盛況を見たるは欣喜に耐へず——七日信徒漢邊又吉氏方に滯留雨中參詣多く、中に警察官、學校敎員等あり、前日同樣法話、來訪者多く法話花咲き夜の更くるを知らず——八日同家にて法話を續く、由來當地は眞宗先入してその敎況盛なるも、一面日蓮門下の弘敎ありて又法威を振へり、予は本日を限り當地を去るを以て、念佛廢獄の論旨を道理、文證、現證を擧げて痛論し、殊に我が國體を說明し來たりたる際の如き、感極まりて嗚泣するものを見受けたり、思ふに敎益多大なりしならん　同夕各信徒二十七名より成る送別宴に臨み、各信徒協議の末、塚田を主人として本宗の敎會所を設置せんとす、祝すべきことにこそ——十二月九日宮崎縣に渡海の準備を整へ、午後四時鹿兒島出船、全地信徒野田氏と同船し、十日細島に着す、同地は基督敎徒多しといふ、本門宗の日要上人は曾て此の附近より出身せられ

宗義を官府に傳奏せられ、頗る折伏家の名高かりしと聞く、日向全國に於ける宗門は日宗教會所一ヶ所の外には本門宗の寺院のみにて、這は薩摩阿闍梨日叡上人といへる、元眞言宗行騰山の大修驗者にて諸宗を學び、後ち終に日運門下に入れる人ありて、終に國内を感化したるなりといふ、以下追報に讓る

●品川教信　我が品川門中は多年毎月十二、廿七日の兩日各寺院輪番に公開演說を催ほし來れるが、去る一月中は十二日妙國寺に於て午後一時より開會

體　新年の所感　久我默宗
信仰　法悅とは何ぞや　梶木日穩
佛教の歸經　本多日生
文學眼より見たる法華經　有田宏道
　〃　梶木日穩
　〃　笹川眞雄

又二十七日は妙運寺に於て午後二時より開會

信仰　佛教の歸經　有田宏道
文學眼より見たる法華經　梶木日穩
　〃　笹川眞雄

尙ほ妙國寺に於ける婦人會の例會は一月十五日夜新年初會を催ほされ、本月一日夜は第二回を開き、孰れも有益なる講話ありき、又例月の宗義研究會は、本年より一層精勵しつゝあれば、都下の有志者、請ふ來り會せよ

●京都教信　當本山の一月中の教界は左之通

一月十三日は例年通妙滿寺國光婦人會の初寄にて、當日は雨天なりしも澤山の參詣者あり、午後二時より法要幷に說教、終て餘興として福引を催し盛會なりき、此日幹事連の協議會ありて、來る四月大法會迄に縮縮の幕新調（價額三百圓余）の由、婦人會の寄附目下幹事諸氏奔走中に御座候

一月十六日、法光院講話會、此日西風尤も寒かりしも三十名余參詣者あり、野口部長の祈禱經に付て、其他諸師の法話あり、終て福引を催し非常の盛會なりき

一月十八日に例月の演說會にて、野口僧正は「耶蘇教に就て」銀井教師は「迷信に就て」鈴木教師は「女子と佛教」川崎教師は「佛と正月」と云ふ演題にて午后七時開會、九時頃には殆ど立錐の餘地なきまでの聽衆にて、過半は學生、其他耶蘇教徒、幷に各宗信徒男女を以て滿され、近年稀なる來聽者、何より喜ばしき事に候、當夜は各辯士共極めて熱心に廣長舌を振はれ申候

二月一日は日經上人の建立せられし彼の五條阪上行寺に於て演說開會、當夜は來聽者少數、辯士は銀井、川崎、三好、鈴木の諸師、午后九時半閉會

來る二月廿日は舊曆正月十九日にて上總七里法華弘通日泰上人の辭月に相當するを以て本山に於ては、當日信者へ案内狀を廻し法要を修行する事、僧侶信徒總代間に相談纏まり、施本として日泰上人歷史を參詣者へ分與の豫定に候（鈴木淡水、通信）

●岡山通信　（前略）當市信徒新年會の概況御報申上候、男子部は、一月七日午後五時内山下弘通所に開催仕候、佛天三寶の加護は一歲一歲と同心の同胞を得て本年はさしも廣き弘通所も處せばき有樣を呈じ、正六

時の鐘と共に、オルガンの音に連れて君が代の聲起り、宗歌「立ち渡る」の奏樂中、御寶前は莊嚴されて心靜かに一座の法要を營み、修法終りて能仁上人の法話あり次きて板野常三郎、大熊虎太郎、戸川健一氏等の新年の所感演說あり、役員を代表して中川事顯氏の諸般の報告中配膳を終へ、各々祝杯を擧げて御代の初春を壽ぎ申候、其の間に餘興員は滑稽問答に一座の衆を破顏一笑せしめ、漸く杯廻はり歡聲酣ならんとするの時、第二の餘興福引は拍手の下に一同に十二分の滿足を與へ申候之の會合中信徒兒島兵吉、鶴見長昌氏の發起にて岡山顯本法華宗共濟會設立の議呈供され、全會員一致贊成の下に成立し、能仁上人は直に幹事として前二名及び久城茂太郎、小野芳次郎、橋本九三郎の五氏を指名して事務一切を一任され申候、何れ内容規則等はくはしく後日御報仕る可く候

翌八日女子部の會合有之候、會場整理は大略昨日の如く、能仁上人の法話を終はると共に、第一回餘興としてオルガン、琴、ヴアイヲリンの演奏有之候、オルガンは横山龜子嬢の手に鶯の曲を、琴は久城モト子嬢の手に春の曲、同じく中藤ヨシ子嬢は鶴龜の曲を、最后に野上靜枝嬢はヴアイヲリンにて幾月を奏せられ、微妙の音は天人の妙音と一座の耳に響きしならん、かくて配膳をなして各々祝杯を傾けぬ、第二の餘興滑稽問答福引は之の間に喝采に迎えられて歡聲湧くが如く萬歲を三唱し兩日共十一時頃散會、會するもの前日は八十余名、後日は百三十余名近來の盛會を極め申候序に篤信會の御報申上候、同會にては新年初會の演說會を去月十九日午後七時本行寺に開催、辯士及び演題は左の通

法華經に現はれたる當體觀　松崎事成
佛と吾人との契合　原田容處
實在的信仰　能仁事一

稀に見る盛會にて聽衆堂に溢れ申候、先は概要のみ申上候不一（中川顯月報）

●注意　記事輻湊に付、宗務廳錄事、並に教學財團公告は、附錄として關係者に頒つことゝせり、請ふ之を諒せよ

●御斷り　前號本誌四五頁の次に新年廣告を組入れたるは、四七、八頁に組ひべき誤にて、末の一頁は四六頁となるべき誤に御座候

又新年廣告中、中田日〇、山崎日〻は中田日遠、山崎日暲とすべきを誤脫致候

右謹て御斷申上候

北澤活版所

主幹 酒井愛邇

日蓮主義信仰鼓吹

佛使

体裁高尚 携帯至便 唯一廉價 行文平易

毎號完結施本好適

一部金貳錢五厘、郵税金五厘、
一ヶ年郵税共前金叁拾錢

日蓮主義信仰鼓吹のため創立せられたる佛使社は其機關として月刊雜誌『佛使』を發行して最も熱誠忠實に其の主義の普及を圖らんとす、外に社員組織を以て講演、出版、研究、營業の各部を置て、專心一意主義目的の宣傳貫徹を期す、則ち佛使社綱領は、載せて毎號『佛使』誌上に公示せり、入社購讀を望む信士女は、請ふ五厘郵券六枚を投せよ、直ちに最近刊見本一部を送呈せ〳〵

『佛使』第壹卷第壹號は明治四十一年一月一日既刊

發行所 北海道函館區相生町 常住寺山内 佛使社

要品値上ゲ廣告

顯本法華宗要品 附回向文

紙價印刷費製本料共騰貴に付無止左の通り値上仕候

一上製分壹部に付貳拾貳錢
一並製分壹部に付金拾四錢 の割(郵税當方持)
五拾部以上は多少の割引可仕候

一御注文は前金に限り候事 十部以上の御注文は郵券代用を諾し候 但し一割增の事

淺草新谷町十四 慶印寺

改名廣告

東京淺草新谷町慶印寺住職
改名日東 山根顯道

吉野町圓常寺住職
改名日雄 鈴木暲學

右今般其筋ノ許可ヲ得テ日號ニ改名候條此段辱知諸君ニ念告候也

(三法堂目印)

●木佛具 金佛具 木像 厨子 大販賣

佛畫表具の元祖 各宗御寺院御入用品一切何にても多少に不限御注文仰付らるべし佛畫は申すに不及御肖像畫專門

木魚位牌卸小賣

小包條例附郵券四錢品諸 三法堂 發賣目錄(正價付)

注意 佛畫佛具佛像位牌木魚其種類品有之候を以て一々記載する能はず依て特に佛畫正價附發賣目錄書を作製致置候に付御入用の諸君は郵券四錢御送付被下候はゞ迅速進呈仕候此の目錄御用ゐになれば寺院樣方の御入用品一切の買物何程遠方でも座ながら安價にて買はれ升其の正札附の品は左の通り

●鳴畫具一切●過去帳の類●大般若經●一切藏經●呼鐘分●位牌●太鼓●佛具金物一切●釣鐘●半鐘●木魚●拂子●曲珠●香●球數●大傘●扇子●中啓●雪洞●鈴●金鑼●ホ引打敷●和幡●唐幡●人天蓋●樂器類●施餓鬼幡●屋根●木像厨子●木彫●經机●額字●黙盤●燈●總量器●三寶揃並に椀平●刷毛●硯茶盞器●菓子盞●行鉢應量器●自鉢●水板●盛物臺●高皿●製裝文車●靈具樣椀●線香●香具類●土瓶にて御買物唯なから自由自在(電話二七八三番、振替貯金番號二〇七一)

各宗御用 三法堂 藤田總治
各畫表具師 全 京都小橋三條通中島町四入
大佛師 東入下ル 三法堂陳列所

誌則

一發行期日 毎月一回 十五日
一誌料 一冊金六錢、十二冊前金六十五錢
郵券代用は一割增、但五厘切手を可とす
一廣告料 一頁拾圓、半頁六圓、四分ノ一頁三圓五十錢、特別廣告十五圓ヨリ二十五圓マデ
一購讀申込 住所氏名を楷書にて認められたし
一代金拂込 振替貯金を便とす、拂込用紙は最寄郵便局より受取られたし、但し此の場合は誌料の外に金二錢を振替口座手數料として餘分に拂込ありたし

明治四十一年二月十五日印刷發行

發行人 井村恂也
編輯人 山根日東
印刷人 鈴木日雄
印刷所 北澤活版所
東京府荏原郡品川町大字南品川宿四百十二番地

發行所 統一團
振替貯金番號 一二一九

統一

第百五十七號

明治四十一年三月十五日（毎月一回十五日）發行